

卒災®ヴィレッジ研究会

第二回卒災®フォーラム “防災から卒災®へ—火災等の災害時における公衆健康医療のあり方を考える” の開催結果報告

開催日時：平成24年7月17日（火）9：00-11：40

場所：東京理科大学森戸記念館第一フォーラム会議室

主催：G-COE 卒災®ヴィレッジ研究会

協賛：順天堂大学大学院医科学研究科加齢制御医学講座白澤研究室

後援：厚生労働省国立保健医療科学院健康危機管理研究部、早稲田大学総合研究機構
公共交通安心安全対策研究所他

フォーラム概要：

東日本大震災を経て火災等の災害時における対応のあり方に関し、さまざまな提案がなされているが、それらの殆どは既往の防災思考に基づくものであり、近未来に発生が懸念されている3連動巨大地震、東京直下型地震、富士山噴火、巨大台風・豪雨、竜巻などに対する備えが不十分との認識から平成24年3月13日に開催した第一回卒災®フォーラムでは卒災®思考の概要とその適用のあり方について意見交換を行ない今後の方向性を探った。今回はその第二回として、火災等の災害時における公衆健康医療の基本的展開について検討を加えた。

本学塚本理事長は所用で参画されないことになったため、代わって本研究会長菅原が開催趣旨について概要を述べた。続いて、元環境庁及び元防衛庁愛知長官から卒災®思考は今後の災害対策への重要観点であると、本会に対するご理解とご支援の挨拶を受けた。また、厚労省国立保健医療科学院健康危機管理研究部金谷部長からは、災害時の公衆医療のあり方は日常的国民健康医療の堅持が非常時にも有効に機能するよう方策を周知させることにあり、本会活動の発展への期待が述べられた。

本会菅原会長は、卒災®思考の自然との関わりについて、生態系の絶妙なバランスが人間活動によって破壊され限界に近づいているという認識の基に卒災®科学を一段と推進する必要性が高まっていると解説した。

Med Web社Peter Killcommons博士は、国際的に展開している医療キットの意義について、大災害時にハンディーで情報伝達性に優れたキットは、公衆健康衛生に役立つだけでなく、モビリティ機能が不可欠である大災害時にとっても有効性を発揮すると、実施例も含め報告した。

順天堂大学白澤教授に代わり同大三浦研究員が、災害時の身体健康保持の重要性についてエベレスト登山におけるモビリティのある医療体制の実証事例を三浦雄一郎の活動を基に報告し、火災等の各種災害時の避難能力の向上を図る研究に対しても有用であるとの認識が得られた。

本学理学部及びG-COE・火災科学研究センター、国際火災科学研究科森田教授は、火災時

等で発生する各種有毒ガスの種類・特徴について整理した結果を報告し、CO や HCN をはじめ多様なガスが発生していることに注目すべきであると述べた。

本会唐川副会長は、大災害時におけるモビリティの切り札の一つである医療船の建設普及の現状について、大型と中規模型の保有機能を中心に解説し、災害時の国民の安全安心を確保するためにも有効であると紹介した。

仙台とどけ隊からは映像による活動状況の報告があり、東日本大震災から1年半を経た今日において、このようなボランティア活動は更に重要性を増しているとの内容であった。

今回のフォーラムは、週日の午前中に急遽開催されたため、関心のある各位への周知徹底が十分になされなかったことは残念である。

閉会挨拶は、本学副学長・総合研究機構福山機構長が所用で参画されないとの伝言を受け、菅原会長が本フォーラムのまとめと今後の展望について所感を述べた。

以上



Killcommons 博士



三浦研究員



菅原会長



森田教授